

あとがき

『社会教育研究』の第一号がやっとできあがった。執筆の各研究員の教官の御苦勞に心から感謝したい。

この社会教育研究室は、石川県の官民一体の要望から生れてから滿二年、実際に活動をはじめてから一年半になる。全国の国立の大学にも前例のないこの教室の性格、内容、研究対象、組織運営などについて、幾度か論議をかきねたが、いまだにすっきりした線がでてこない。社会教育の原理について研究する原理部門、社会教育の史的な研究をする史的部門、社会教育の実践的方策についての研究部門、社会教育に関する調査部門の四部に分けて、研究の発足をしたのであるが、何分学問として十分発達していない社会教育の原理について研究を深めるにしても、ただ外国の教育理論の受売りでなく、本当に日本の国情にそい、地方の要望をも考慮に入れながら、しかも学問の基礎付をもったものであるためには、社会教育の史的背景、社会教育の現実の状態について広く見、深くさぐらねばならない。そこに実践調査の部門の必要も生れてくる。そしてこれらの研究が綜合されて、新しい日本の社会教育のあるべき姿が考えられると思うのである。

しかし講師の教官は、それぞれ、本業の余暇において、この研究、指導に従事していられるので、性急にその成果を期待することはできない。この社会教育研究も、その研究の一端であるが、卒直にいつて、この社会教育研究を読まれる人は、その雑誌の内容と表題との落差のやや甚しいのに失望されるのでないかと思われる。

恐らく社会教育関係の学者は、社会教育そのものの研究でないことに失望し、一般社会教育の指導者にとつても、適切にその悩みとするところを解決するテーマでないことに失望せられるかもしれない。しかしこれらの批判は当方でも承知しながら、第一回の年報としては、必ずしも社会教育に直接関係がなくとも何等かの意味で多少の関係があ

ればよいとしたことによるので、それは教室がまだ成立後日も浅く、各部門の研究も綜合する程の發展を見せていないからである。読者もこの点を御察しの上、名の実にそわないことをお咎めならないようお願いする次第である。本教室は第二号として、社会教育の実地調査に主眼をおいて、編集せられる予定である。研究内容については、大学の教室にふさわしい、学問的香気の高いものにしなさいというのが理想であるが、恐らく読者の層から考えると、大学に於ける関係者より寧ろ実地の指導者で、社会教育指導上の問題点について、種々の壁にぶつかって悩む人達の方が、はるかに多いのでないかと思うと、学問的であつて、しかも平易でありたいということを、念願している次第である。

今年、グループ研究のテーマとして、青年学級の問題、農村の研究、社会心理の研究、東洋思想の研究など、各グループに分れて、研究討議をすすめている。その他、講座の開設も地方にまで拡張し、合宿研究会も企図するなど、教室の活動は、活潑広汎になりつつある。

元来大学というところは、教育ということに関心の少いところで、殊に一般大衆相手の社会教育などというに至つては、殆んど問題にされない。文部省依頼の大学開放の専門講座にしても、聴講した人達は難解であるとの評も高いので、折角有益な講義であつても、聴講者が少いという結果にもなる。この教室が、大学の研究と民衆とを結びつける窓ともなれば幸である。

今後の教室の実地の活動状況については、第二号に報告することとして、大体本教室の規定等を左にあげて、御参考に供したいと思う。

最後に本教室の維持運営、本誌の発行等に御協力を頂いている。各官庁公共団体、並びに社会教育に理解ある民間の有志の方々に厚く御礼を申しあげる。

永なが
守もり
良りょう
治じ